

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520633

研究課題名(和文)リフレクティブ・プラクティス実践過程における英語教師の談話の変容に関する実証研究

研究課題名(英文)An empirical study on the change of teachers' narrative through the process of the reflective practice

研究代表者

玉井 健 (Tamai, Ken)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20259641

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、リフレクティブ・プラクティスを通して教師が気づきに到り、ピリーフを書換える過程の実証的解明及び理論的整備を行った。方法としては、Webジャーナルの談話分析と教師への定期的インタビューの会話分析により、実践過程での教師の内省を縦断的に記述・分析した。特にawareness(気づき)という特徴的な変容に至る過程に焦点を当ててその解明を目指すとともに、リフレクティブ・プラクティスそのものの概念整備にも取り組んだ。成果として、「気づき」に至る多様なプロセスが取り出され、教師と学習者相互の関係性の中で捉えられるものと分った。また研究方法理論として現象学的アプローチの有用性が浮かび上がった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is two fold. One is to clarify the process of a teacher attaining awareness and rewriting previous beliefs. Another is to organize theoretical frameworks that support the Reflective Practice. As means of research discourse analysis was carried out on the text of the web-journal written by a community of teachers and conversational analysis was administered on the interview texts. In the analysis a focus was put on a state called "awareness" experienced in the process of teacher's changes. As the result of researches, a variety of processes through which learners attain awareness were carved out and the need of capturing "awareness" in the relational perspectives was confirmed. As a useful theoretical framework to capture the Reflective Practice, phenomenological approach has emerged and its use was discussed and confirmed in the data.

研究分野：英語教育

 キーワード：教師教育 的  
 的研究法 リフレクティブ・プラクティス アクション・リサーチ 気づき 談話分析 会話分析 質  
 現象学的アプローチ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は英語教師教育分野において、従来の他律的な研修によるのではなく教師自身による自律的な成長を志向する実践研究方法としてのリフレクティブ・プラクティスをテーマとする。

リフレクティブ・プラクティスについては、単に教育分野にとどまらず、医療、看護、スポーツ、ビジネス経営等対人サービスの文脈に関わる幅広い分野で応用と実践が行われており、その有効性が広く喧伝されてはいる一方で、概念的に必ずしも明確な定義がなされているとは言えない状況にある。結果的に理論的解釈と実践方法において様々なモデルが提示されることとなり、一つの中心的概念に基づく理解の共有あるいは実践、研究が期待できる状況にあるとは言えない。これは「リフレクション(内省)」そのものがまだ理論的検討、実践法の開発整備を必要としていることを示唆していると思われた。

また、本邦英語教育学界における研究方法の重心は量的実証研究にあり、客観性と結果の一般化が追求される結果、教師教育、特にリフレクションという主観的記述を研究方法の柱として捉え、それによって自身の変化をビリーフ・レベルで捉えようとするというような質的教師教育研究は甚だ未発達で関心も薄く、学問的にも実践的にも手つかずの状態にある。

一方海外では、リフレクティブ・プラクティスが様々な臨床分野での専門家育成に応用される事例と研究は急増しており、アイルランドではすでに看護医療教育において国家的に取り組みが始まって久しい。本邦においても、こうした実践者による研究は看護学分野において若干の導入は見られるものの、まだ端緒についたばかりと言え、外国語教育分野における理論的発展、実践的応用は急がなければならない。以下に

外国語教育分野におけるリフレクティブ・プラクティスあの学術的背景を概観する。

外国語教育におけるリフレクティブ・プラクティス(経験についての記述と内省から導かれる理解を授業分析の中心に位置づけるアクション・リサーチの一形式(玉井,2011))は、教師が自律的に成長するための研究方法として海外では広く実践されてきた。特に Shon(1982)による Reflective practitioner(内省的実践家)の概念は、教師の自律的な成長の意義に教育界の目を向けさせた研究と言える。リフレクティブ・プラクティスの理論的背景は、主に米国の教育思想家である John Dewey の経験主義教育思想にその理論的位置づけがなされてきたが(Rodgers, 2002)、近年、他の分野から新たな理論的な解釈が施されつつある。例えば社会文化理論の立場からの教師の実践知研究(Golombek, 2009)、ナラティブを用いた成長過程の記述研究(Johnson & Golombek, 2002)、あるいは教師認知(Teacher cognition)という新しい概念の登場(Borg, 2003)とともに、実践研究方法としてのリフレクティブ・プラクティスに新たな光があてられつつある(Freeman, 1998)と言える。これらに共通するのは、教師のビリーフ変容にリフレクションが大きな影響を持つという理解であるが、一方で、リフレクションがどのように影響しているかについては、未だ十分に研究が進んでいない(Burton, 2009)。これは、リフレクションの定義も含めて、リフレクティブ・プラクティスについての理解が研究者間で共有されていないこと(Rodgers, 2002)が挙げられる。

当該研究法は現在英語教育界で主流となっている要素主義的な研修スタンスの対極にあると言えるが、それだけにその教育方法論的意義はできる限り具体的に把握される必要があり、まだ十分に検討されていな

い部分は新たな理論的説明も必要と思われた。本研究はそういった必要性を意識して計画された。

## 2. 研究の目的

研究実践の拠点：研究費申請者が勤務する大学院の英語教育専攻に所属する学生のうち、「英語教育指導分析1」という講義を中心として参加者グループが形成された。

期間：2012年4月～2015年1月

研究1のテーマ：

(1) ジャーナル・ライティングを内省技術発展の方法とした場合の実践法開発と参加者の内省のなされ方の構造的分析及びその変化の記述及び分析。

(2) 授業研究方法としてのリフレクティブ・プラクティスの理論的視座の探究。

研究2のテーマ：

講義参加者へのインタビューを通してのメンターの役割、貢献はあるか。上記講義でのリフレクティブ・プラクティス実践参加者が、定期的に研究者と実践について話すための面接を行うことの効用、及びこの面接の研究者への影響、2年半にわたる面接を通しての変化を探る。

## 3. 研究の方法

研究1の方法：

教育実践：

クラウド上にWeb-journalを設置し、4月末から7月半ばまで約3か月一つのファイル上でジャーナルを共有する。ジャーナル・ライティングについては書き方指導を4月当初に行う。ジャーナルは週1度金曜日に各参加者がその週の授業実践をふり返って書いたジャーナルをアップし、土日を使って他のジャーナル2点に非判断的コメントを書く。本講義責任者は全てのジャーナルに非判断的コメントを書く。各月の最終週の土曜日に談話会を開きその月のジャーナルについて意見交換を行い、リフレク

ティブ・プラクティスについて話し合いを持つ(計4回)。

分析：

談話分析が、セッション終了時まで書かれ続けたグループによるリフレクティブ・ジャーナルについて行われた。

研究倫理：

各年度最初のジャーナル・ワークショップにおいてプライバシーに関する話を行い、web journal 上に書き込まれるテキスト、及び交わされるコメントについての守秘義務について話した。また、研究に用いる場合は授業担当者を含め、全ての当事者に使用する該当箇所の是非について承諾を得ることを口頭で伝えた。

研究2の方法：

教育実践：

上記講義履修者から参加者を募り4人が参加を決定。個々にアポイントを取り約30分を目途に日々の実践に関わる話題について半構造化インタビューを行う。面接者は被面接者の自己発見が促進されることを意図しつつ、非批判的スタンスを取りつつも相手の話意識を傾けて傾聴し、焦点化を促す質問や言い換えなどを行い、面接を通してリフレクションが有効に行われるように面接を行う。面接は挨拶2013年1月、2013年7月、2014年1月、2014年7月、2014年1月の五回に亘って同一グループに対して行われた。

分析：

インタビューはビデオ録画され、音声は書き起こされ、テキストデータとして会話分析が行われた。

研究倫理：

全ての参加者にはインタビュー参加への承諾を電子メールにて取り、データの取り扱い方についてはインタビューの開始前に口頭で説明された。

## 4. 研究成果

3年間に亘る本研究を通じて、リフレクティブ・プラクティスという英語教育における授業研究法の実践法としての様々な可能性が検討されたが、その過程で新たな実践形式、研究課題とされるべき側面、さらには新たな理論的な視座が開けてきた。いずれも研究の具体的実践法を追求する中で見えてきた。

例えば、研究1における玉井のウェブ・ジャーナルの協働実践は、その形式と深まりにおいて本邦に例を見ない新しい実践であったと言えるが、そこで協働的になされた内省とその意義を十全に捉えるには、さらに今後の分析を待たねばならぬ部分がある。リフレクティブ・プラクティス研究における新たな研究法を追及する試みについては、看護学分野における研究文脈との相似性にヒントを得て、今までとは異なる研究方法が実現可能性をもって立ち上がってきている。これは自然科学的な視点による客観性や一般性を伴うというのではなく、「学び」という経験が学習者にどのように経験されているかに注目した質的研究方法である。こうした新しい視点が方法論的な形を整えるにはまだ時を要するが、少なくとも本研究の成果として新しい視座が開かれたと言えるだろう。

研究2において研究者が定期的な面接を通じて現場教師によるその時々経験に寄り添おうとするナカムラの実践は、単なる研究データ収集に留まるのではなく、それぞれが一つのリフレクティブ・プラクティスであり、またその実践性によって授業研究の未知なる側面を浮かび上がらせたとも言える。

こうした成果は、別途報告書に示されているように、すでに3年間に様々な学会で発表し学界にその成果を問うてきている。

特に昨年夏には、科研費及び申請者の勤務する大学の支援も得て、リフレクティ

ブ・プラクティスをテーマにした小規模の国際シンポジウムを開いてその成果を広く世の中に問うた。様々な応用的実践が共有され、リフレクティブ・プラクティスの新たな方向性を探るべく議論が行われ、3日間にわたる会議を有意義なものとして成功裡に終わることができた。現在、本シンポジウムを基にした叢書を執筆中であり、2016年3月の公刊を目指している。

本科学研究費によって、海外の分野の異なる様々な研究者との交流が可能になり、自由な議論、調査、資料の収集が可能になるとともに成果発表も行えた。3年間に亘る日本学術振興会の寛大なる支援に感謝したい。成果発表は今後さらに継続的に行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

玉井健(2013) 授業改善のためのリフレクション術：フィードバックを使ったリフレクション, 『英語教育』2月号, 大修館, p.30-31.

Nakamura, I. (2012). Reflections on learning from a study leave: One year later. *Bulletin of Higher Education*, Okayama University, Vol. 8, 151-161.

Nakamura, I. (2014) A discussion of practitioner research: How are reflective practice, action research, and exploratory practice different? *Bulletin of Higher Education*, Okayama University Centers Publication, Vol. 10, 105-116.

Nakamura, I. (in press) Learning and working for meaningful communication in interviews: Making a transition from the teacher's questions to the student's questions and why it matters, BAAL (British Association

- of Applied Linguistics) 2014  
Conference Proceedings.  
〔学会発表〕(計 14 件)
- Tamai, K. (2012) From Judgment to refined description: Shift of teacher's reflective literacy based on genre analysis of teaching journals, 全国英語教育学会愛知研究大会 The Japan Society of English Language Education (愛知学院大学日進キャンパス, 8/4)
- Tamai, K. (2013) Impact of systemic functional framework as a means to capture a teachers' growing reflective literacy: a case study of a Japanese English teachers' web-journal, British Association of Applied Linguistics (University of Edinburgh, 9/4-7))
- Tamai, K. (2014) Use of epistemological lenses in the reflective practice: a look on experience, KCUFS Reflective Practice conference, 8/28-30.
- Tamai, K. (2014) Dimensions in the analysis of reflective journal data: Temporality, inter-subjectivity and care, KCUFS Reflective Practice conference, 8/28-30
- Nakamura, Ian & Tamai, K. (2014) Exploring Reflective Practice through interactions between teachers and students through spoken and written discourse analyses: Benefits and challenges of applying conversation analysis to interviews and a systemic functional analysis to journaling, EELC5 (Conference: Explorations in Ethnography, Language and Communication 5), The University of Manchester, 9/11-12.
- 玉井健(2014) 『解題リフレクティブ・プラクティス：実践者による実践者のためのリサーチ、その理論と方法、わかりにくさの背景』関西英語教育学会第32回 KELES セミナー招待講演, 神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ (9/23).
- Nakamura, I. (2012). Contingency based questions: Making a difference. Japan Association of Language Teaching (JALT) annual conference, Hamamatsu, October 12-15.
- Nakamura, I. (2012). Are interview questions agenda based or contingency informed? British Association of Applied Linguistics (BAAL) annual conference, Southampton University, UK, September 6-8.
- Nakamura, I. (2013). Applying Conversation Analysis to practices and professions: Can it help language teachers? International conference-symposium-workshop on 'social interaction in international encounters'. Kansai University, Senriyama campus, March 5-7.
- Nakamura, I. (2014) Exploring teacher responses to students' questions: From description to pedagogy, Reflective Practice Conference, Kobe City University of Foreign Studies (8.28-30) .
- Nakamura, I. (2014) Conversation Analysis for language teachers: Finding application, Reflective Practice Conference, Kobe City University of Foreign Studies (8.28-30).
- Nakamura, I. (2014) Learning and

working for meaningful communication in interviews: Making a transition from the teacher's questions to the student's questions and why it matters, BAAL (British Association of Applied Linguistics) 2014 Conference, Warwick University(9/4-6).

— Nakamura, I(2014) Exploring teacher responses to students' questions outside of the classroom: Learning from description and applying to pedagogy(9/10).

— Nakamura, I. (2015) Learning and working for meaningful communication in 'interviews' as a form of teacher- student talk, ETAL lecture series on TESOL and Applied Linguistics, Edinburgh University.

〔図書〕(計 1 件)

玉井健(2014)「リフレクティブ・プラクティスと英語教師の成長」, 第10章「成長する教師論」3節, 『英語教育学の今 - 理論と実践の統合』, 全国英語教育学会40周年記念特別誌, pp.265-269.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

玉井 健 (TAMAI, Ken)  
神戸市外国語大学外国語学部教授  
研究者番号：20259641

(2)研究分担者

ナカムラ イエン (NAKAMURA, Ian)  
岡山大学言語教育センター教授  
研究者番号：90320027

(3)連携研究者

( )

研究者番号：